

# 学 習 と 図 書 館 改 革

——お茶の水女子大学——

茂出木 理 子

## はじめに

お茶の水女子大学の前身は、1875年にわが国最初の女性のための高等教育機関として開学した、東京女子師範学校である。本学は、その伝統と校風を受け継ぎつつ、国立の女子大学として、21世紀に幅広い分野でグローバルに活躍できる女性の人材育成をめざし、全学的な教育改革に取り組んでいるところである。2007年度には、全学一体型の大学組織「人間文化創成科学研究科」を発足し、附属校園から大学・大学院までを見通した教育研究体制を整備した。2008年度には、充実した教育カリキュラムを進めるための全学教育システム改革推進本部を設置し、「21世紀型文理融合リベラルアーツ教育」をスタートした。

2006年度から開始した、附属図書館における様々な取り組みも、すべてこの大学の教育改革に連動したものである。本学ホームページの記事「21年度に、お茶大の教育がこう変わります」([http://www.ocha.ac.jp/topics/h210129\\_2.html](http://www.ocha.ac.jp/topics/h210129_2.html))の中でも、その一項目として附属図書館の取り組みが取り上げられている。本稿では、大学図

書館が大学全体の教育改革と連動した動きをとることで、図書館が教育改革の実践の場として機能できる可能性があることを、本学図書館での具体的な取り組みを通して紹介する。

## 1. 施設面でのイノベーション

(ラーニング・コモンズ、キャリアカフェ)

本学図書館は、1959年に建てられた2階建ての施設である。何度か増改築が行われてきたが、総床面積は、国立大学図書館の平均の40%にあたる4,500㎡にすぎず、決して恵まれたものではない。また、近年のIT化に沿った学習・教育支援に向けた、機能的な動きがとれていないことも、大きな課題であった。そこで、2006年度から大学全体で「21世紀型リベラルアーツ教育」の議論が進められたことに並行して、図書館における課題を全て、具体的な実行性を持って解決すべく、「図書館の将来像に関する検討」を開始した。その検討で特に注力したことは、大学図書館の基本的な機能として、資料の提供と保存に関すること、そして、「学習・教育環境と図書館」についてであった。この検討の元になったの

は、本学図書館の理念『お茶の水女子大学附属図書館は、時間と空間を超える知的交流の場であり、次世代の知を創造し発信する学術情報基盤として機能する』（2006年4月に策定）である。つまり、この理念をどう具体化し、図書館が大学の教育改革の中で貢献するかということが、検討の目標であった。

今回の施設改善において、中心となったのが、「ラーニング・コモンズ」と「カフェ的な空間」を、図書館の1階に置くということであった。ラーニング・コモンズとは、1990年代から、欧米（特にアメリカ）の大学図書館が新たに展開した施設モデルであるが、学生が自由に使えるパソコンや、ネットワークなどのICT機器が完備されていることに併せ、学生が学生生活に関する様々なサポートを受けられる、人的支援があるという点が特徴である。

本学で、ラーニング・コモンズを検討するにあたり重要だと考えたのは、施設面の充実より、運用面での「コモンズ」についてである。コモンズは、共有地と訳されるように、皆のものである、すなわち、誰のものでもないということがポイントである。特に、本学のような小規模な組織において、各部署が単独で何かを行うというのは効率的ではなく、また無理が生じる。したがって、われわれは、ラーニング・コモンズを図書館だけのものではなく、全学の共有地として、学生の学習・教育をサポートする場として位置づけた。具体的には、情報基盤センターとの密接な連携協力により、機

器面の導入、管理、運営、そして、人的サポートとして、大学院生のTAによる「ラーニング・アドバイザー」の常駐などを実現させている。

同様に、図書館1階の入り口近くのオープンな場所に設置した「キャリアカフェ」は、本学が2007年に採択を受けた現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）『科学的思考力と表現力で築く「私の履歴書」』と図書館、そして、情報基盤センターの学内コラボレーションにより実現した。この3者がお互いにそれぞれのスタッフの強みを活かしたアイデアと資源を持ち寄ることで、効率的な立ち上げと運用が実現できている。

## 2. ラーニング・コモンズ

本学図書館での取組みの特徴は、スピードが大変早いという点にある。

本学のラーニング・コモンズは、図書館の将来像の検討を開始してからわずか半年後の2007年4月に、図書館1階の南側の約155㎡の場所を利用し、設置した。この場所は採光を配慮した、館内でももっとも開放的で明るいスペースで、外からも見えやすいという利点を持つ。このスペースには、2009年3月現在で、学生用パソコンが70台、持ち込み用のパソコンが使えるデスクが8台分（認証ネットワークのポートが利用可能）、スキャナー・コピー機能付のネットワークプリンター1台が置かれているほか、図書館1階全体で無線LANが利用できる。ICT機器の設置に加えて、ラーニング・コ

モンズ内には、情報基盤センターと図書館の協力により、パソコンのマニュアル本や、アカデミックライティングやプレゼンテーションに関する本などを置き、学生に自由に利用してもらっている。ラーニング・コモンズでは、学生が自由にパソコンを使ってレポートなどを書くほか、授業、ワークショップ、論文検索講習会などの会場としても活用されていて、授業がある期間の日中は、ほぼ満席の状態である。

### 3. キャリアカフェ

キャリアカフェには、週1回「キャリアレポートアドバイザー」が在席し、相談に訪れる学生に就職活動や、自分の将来像に関するアドバイスを行っている。キャリアカフェは、学生が主体となった様々な企画が実践される場でもある。例えば、自分が興味をもっている分野に進んだOGを招いての座談会や、大学院生による研究発表会（サイエンスカフェ in キャリアカフェ）が開催されている。この実践は、学生が受け身ではなく主体となって動くことで、企画、実行力、そして、大人の女性としてのマナーも含めた総合力を身につけさせるという、教育的側面を持つ。そのようなイベントが、図書館という共有の場、常にオープンな場で実施されていることの意味は大きい。なお、キャリアカフェでの活動の様子は、以下のホームページに詳しい。

[http://sec.cf.ocha.ac.jp/cagp/cafe/event\\_index.html](http://sec.cf.ocha.ac.jp/cagp/cafe/event_index.html)

### 4. ノートパソコン貸与プログラム

本学では、ラーニング・コモンズのオープンと同時に、2007年度から、新入生全員へのノートパソコン貸与プログラムをスタートした。このプログラムは、本学の「21世紀型文理融合リベラルアーツ教育」の目標のひとつである、情報リテラシーの活性化方策のひとつだが、

- ①貸与用に準備したノートパソコンには、あえてワープロや表計算ソフト等のアプリケーションソフトを入れず、学生が自分で必要なソフトを自分でインストールし、自分なりのパソコン環境を構築し、学習に役立てられる技能を習得すること
- ②パソコン管理者として自覚を持って管理できる技術と知識を習得すること
- ③ネットワークセキュリティに関する知識を習得し、社会的責任を自覚することなどを、プログラムとして盛り込んでいる。貸与期間の最後には、各自がパソコンを初期状態に戻す技術の習得（リカバリー講習）までが、授業の一環として組み込まれている点が特徴である。

このプログラムは、全学教育システム改革推進本部の下のリベラルアーツ部会、情報基盤センター、貸与パソコン相談室、図書館などの多くの部署の連携により実施している。

### 5. 運用のコモンズとは

ラーニング・コモンズやキャリアカフェを図書館の中に設置することと、ノートパソコン貸与プログラムを実施することとは、

共通した考えによるものである。それは、学生にとって学習・教育に必要な不可欠のもの、すなわちICT機器であったり、サポートスタッフであったり、自主的に自由に活動できる場所などは、大学がなるべく広く用意し、提供する必要があるということである。そして、特に本学のような小規模大学においてポイントとなることは、運用のコモンズである。運用のコモンズとは、教職員だけではなく、学生も含めて自由に議論し、意見を出し合い、連携してものごとを実現するということである。実際、全学教育システム改革推進本部の元に置かれた「リベラルアーツ部会」の会議は、部会員のほかにも全学の教員、職員がオブザーバ参加することが可能であり、図書館の実務責任者として私が、「リベラルアーツ科目群の授業にそった資料を図書館に備えること」を部会の先生方に直接、提案することもできた。

ラーニング・コモンズやキャリアカフェのように、一見、自由気ままに見える共有地は、自由であることと傍若無人にすることは違うということを、学生が学ぶ場所でもある。自分も含めて、その場にいる全員が気持ちよく過ごせる場にするには、どう振る舞えばよいのか、すなわち、自律とは何かを学ぶ場でもある。そして、自分たちが作り出すことによる、「コモンズ的な場所」の心地よさと楽しさを共有する場である。このような点から、学内でもっとも（あるいは唯一の）公共の場所である大学図書館が、全学のラーニング・コモンズの場と

して存在し、機能することは、大学図書館に学習・教育に必要な資料があることと並んで、重要なことであると考えている。

## 6. 職員の意識・行動面での イノベーション

図書館職員が、基本的に自己の職務に熱心であることは、これまでも評価されてきたことであるが、一面、狭い範囲の仕事に埋没しがちであることも指摘されていた。今回の改装計画では図書館事務室を、ラーニング・コモンズとガラス窓で隣接するスペースに移動させたが、目指したのは、事務を閉じないということである。これは、サービス担当以外の職員も、ラーニング・コモンズをはじめ、図書館で過ごす学生の様子を毎日見ることで、意識改革が進むことを意図した。その成果は、職員自らが、図書館が学生のためにできることを考え、発案できるようになったことである。

具体的な事例の中から、2つ紹介したい。

ひとつは、「学生ILL料金の無料化」である。学内に必要な文献がない場合、図書館は、他大学の図書館に文献の複写を依頼する、あるいは図書の貸出を依頼することを行っているが（これを「図書館間相互貸借（Inter Library Loan・ILL）」と呼ぶ）この料金負担について、学生の依頼分を無料にする（大学負担とする）という改革である。学生のための学習・教育支援という観点と、学生から料金を現金で徴収する事務負担を軽減するという点から検討し、2007年10月から、学生のILL料金の無料

化をスタートさせた。このことで、学生からのILL申し込みは倍増したが、依頼文献を分析することで、学生が必要としながら本学で揃えられていなかった文献が明らかになったことなど、今後の図書館戦略を検討するための材料が入手できた点でも、効果があった。

もうひとつは、2007年11月にスタートした、図書館職員と学生の協働により図書館の活性化を図る「LiSA: Library Student Assistant」プログラムである。このプログラムは、現在第3期が終了したところであるが、每期10名～13名の学生がLiSAメンバーとして、様々な図書館業務の手助けをしてくれている。LiSAの業務報告書に書かれた文章を、いくつか紹介したい。「LiSAを通して、どうやって行動を起こし、物事を変えるのかを体験できた」「不満は同時に、その状況の改善につながる最大のチャンスであると感じた」「日常に何気なく存在する施設の運営を知り、ものごとを違う面から見ることができたのが、最大の収穫だった」「仕事に対する責任感を実感した」。このプログラムは、これまでの図書館が実施してきた学生支援とは異なるが、図書館の存在と活動が学生に対して、広い意味で教育の場にもなることを示唆している。

## 最後に

本学図書館では学生サービスを基軸に、オーソドックスな手法で様々な変革を行い、その成果を大学の教育研究基盤に還元

してきた。言い換えれば、まっとうなことをまっとうな方法で実施しているにすぎないが、その成果は、徐々にではあるが現われてきていると考えている。図書館の入館者数は、2006年度に比べ、2008年度は約46%増加した。また、本学が定期的実施している、学生生活のアンケート調査で、図書館のスペースに関する満足度は、2004年～2007年度の卒業生に比べ、「満足」と回答した学生の割合が、約16%アップしている。

これまで大学図書館界は横のつながりが強く、前述のILLサービスの展開、全国的な共同分担入力による総合目録データベースの形成（NACSIS-CATシステム）、職員の研修など、国公私を超えた図書館ネットワークで、業務の効率化とサービスの向上を図ってきた。一方、学内他部署とのネットワークは決して強いものとはいえず、孤軍奮闘、あるいは、孤高の部署として位置してきた感がある。学習・教育支援は、大学図書館にとって重要な課題であるが、今回、本学図書館で改革を進めるにあたりもっとも意識したことは、学内で図書館はどう振舞うべきか、という点である。短期間に多くの具体的な成果を上げられたのは、前述したとおりの図書館職員の意識および行動改革を並行して行ったこと、そして、小規模大学ならではの強みを活かし、学内の様々な部署との連携を積極的に図ったことが大きいと考えている。さらに、図書館のこのような活動に賛同いただいた大学同窓会組織から、バザーの収益金の全額を図

書館にご寄付いただいたことも、力強い後押しであった。

本学の事例が、他大学、特に小規模大学

のご参考になれば幸いである。

(お茶の水女子大学図書・情報チームリーダー)